



イスラエル軍のガザ攻撃 (1)

主席研究員 中島 勇

イスラエル軍は、12月27日からガザへの空爆を開始した。12月中旬に半年間の停戦が終了した後、停戦の延長の動きは低調だった反面、ガザからイスラエル領内へのロケット弾が増加していた。そのため、イスラエル軍は防衛的措置であることを強調している。イスラエル軍は、27日以降、ハマス施設、イスラム大学などのハマスのインフラに対する集中的な爆撃を継続した。

1月3日、イスラエル安全保障閣議は、空軍が空爆目標の大半への作戦を終了したとの報告を受け、地上部隊の作戦開始を承認した。ガザに隣接する地域にいた砲兵部隊などは、同日午後からガザに対する砲撃を強化した。イスラエル軍は、1月3日夜 - 4日未明にかけてガザへの侵攻作戦を開始した。作戦の詳細は不明であるが、イスラエル軍はガザ北部で主な作戦を実施していると報道されている。ロケット弾の発射を阻止するために空き地を抑え、都市部との通路を遮断している模様。バラク国防相は、作戦は短期間では終わらないと発言している。停戦を求める声が増加しているが、国連安保理は、米国の反対もあり議長声明さえ出せていない。仏国のサルコジ大統領は、5日にイスラエルとパレスチナを訪問する予定。安保理は、6日にもガザ情勢について協議する予定のようだ。1月5日時点で、ガザのパレスチナ人の死者は、500人を超えた。内約100人が市民だと報道されている。イスラエル人側の死者は市民4人、兵士1人。一般市民が巻き添えで死亡することへの非難が高まって、停戦への動きは1月4日から本格化しているが、停戦が実現するとしても、まだ時間がかかるようだ。イスラエルのシンベド長官は、4日の閣議報告の中で、ハマス側が停戦条件を緩和する兆候があると述べている。イスラエルとハマスの間では、仲介者を經由して停戦交渉が継続しているのかもしれない。

【評価】

(1) イスラエル軍は、相当準備をしてガザに対する攻撃を開始したようだ。空爆開始前から最初に空爆、その後地上部隊を投入するとの計画が報道されていた。イスラエル側の報道では、イスラエル軍は空爆の効果をかなり高く評価している模様である。イスラエル軍が、かなり本気であることをうかがわせるのは、3日に空爆目標の爆撃が終了した段階で、即時、陸上部隊の投入を決定した点である。イスラエル側のメディアは、2006年の第二次レバノン戦争での失

敗を学習したイスラエル軍は、ガザでの戦闘で、改善した部隊運用の実戦演習をしていると分析している。イスラエル軍は、3旅団の兵士を投入しており、従来躊躇していた歩兵も投入している。

イスラエル軍は、ハマスのロケット弾を完全に止めることはできないかもしれないが、イスラエル国民に、戦える軍隊であることを誇示できれば、一つの政治的成果になるだろう。またイスラエル軍が、ガザで、レバノンのヒズボラとの戦争のための部隊運用を実戦で演習をしている可能性はある。

- (2) ハマスは、空爆開始後、これまでロケット弾を撃ちこんだことのないアシュドットやベルシェバを攻撃し、射程距離 40 キロ以上のロケット弾を保有していることを初めて証明した。しかし、ハマスのロケット弾攻撃には、軍事的戦略も政治的目的も欠落しており、ロケット弾攻撃自体が目的化している。その結果、戦略のない武装闘争の代償は、ガザ住民が払わされている。ハマスは、ガザ住民へのイスラエル軍の攻撃を誘発しただけでなく、住民の犠牲を、パレスチナ側の政治的資産にできず、国際世論の支持取り付けも限定的になっている。

今後、ハマスに対するパレスチナ内部、あるいはアラブ世界での不満や批判が、増大してもおかしくない。国際社会は、イスラエル軍の過剰な軍事力行使により一般住民に犠牲が出ていることを非難しているが、ハマス支持が増加しているわけではない。

- (3) イスラエルでは、2月10日に総選挙が行われる。今後約4週間のガザ情勢の展開が、有権者の投票行動に影響を与えるのは確実だ。与党（カディマ、労働党）は、第二次レバノン戦争の教訓を部隊運用に反映させたことを実証し、ガザからのロケット弾攻撃を一時的でも停止させることができれば、選挙戦も有利になる。労働党は、10議席前後に低迷する公算が大きいだけに、バラク国防相の働きに党の将来がかかっている。しかし、ガザ侵攻が長期化し、ロケット弾発射も阻止できず、イスラエル軍兵士の損害が増大すれば、野党リクードの有利に作用する。